



第 21 回

原点は尊厳と自律

「寝たきり老人」という言葉が高齢化の先輩国にないことを“発見”したのは、1985 年でした。日本でなら1日中、寝間着姿で横たわっているような人が、歩行器や車いすを使って“歩いて”いました。しかもお洒落をして。

何故だろう？ 貯金を降ろし、海外を訪ね歩きました。「ホームヘルパーが朝昼晩現れる」「訪問看護婦は名探偵」など、12の秘密を見つけて『「寝たきり老人」のいる国いない国』にまとめました。この提案は介護保険制度の創設につながっていきましたが、反対論も激しいものでした。

「保険料の負担を持ち出したら選挙に負ける」

「日本の美風を壊す」

妥協を重ねてのスタートでしたから、あちこちにほころびが見えます。とはいえ、本人の身になったケアに挑戦していた人々は口をそろえて言います。「ご本人の負担を考え利用料を抑えていたので、いつ潰れるかという状況でした。制度ができ、利用



者には9割引きになり大助かりでした」

にもかかわらず、心ならず病院で亡くなる人は世界に例のない増え方で

9割に近づいています。

そこで、85%の人が自宅で人生の最期を過ごすデンマークのオーフス市を訪ね、可能にする仕組みを探しました。

24 時間対応のヘルパーと訪問ナース、電話1本で駆けつける家庭医、困難な症状には助太刀してくれる総合病院の緩和ケアチーム、家族や恋人が有給でとれる「看取り寄り添い休暇」。在宅を支える要であるヘルパーの月収は 40 万円ほど。背後には、尊厳と自律を大切にする文化がありました。

この 2002 年秋の旅には、この上ない道連れがいました。山崎^{ふみお}さんです。

山崎さんは 2005 年、育て上げた桜町ホスピスを後輩にまか

せ、在宅ホスピスという新しい道に飛び込みました。それから7年。

「昨年1年間でみると、がんの患者さんの 9 割が自宅で最期まで過ごしていました。残る 1 割の方を家で看取れなかったのは、介護力の限界です。最後の3週間ほどを滞在型ヘルパーなどで支えられれば、ほとんどの方が最期まで家で過ごせると思います。不思議なことに痛み止めの薬の量も少なくてすむのです。家という場の力なのでしょう」

法律や制度は建物に似ています。法律が成立して使い始めたときには、足場も、設計図の修正の跡もなくなって思いが伝わらないのです。介護保険制度の原点となった 1989 年の介護対策検討会報告は、こう書いています。

「どこでも、いつでも、的確で質の良い、24 時間安心できるサービスを気軽に受けることができる体制を目指すべきである」

介護保険の現場・行政・政治は、介護の社会化のこの原点を見失ってはならないと思います。



国民すべてが自分の選んだ家庭医をもつデンマークの制度も威力を発揮します。右端の女医さんは、「ターミナル期の患者さんには、『いつでも電話をどうぞ』とプライベートな電話も知らせています」と言いました。家庭医は病院の部長級の尊敬を受けるプライマリーケアの専門医で、平均 1,600 人の患者を受け持っています。左端はケア付住宅の責任者、中央は夜間専門ナース。

編集部註：本連載は、小社から刊行している『誇り・味方・居場所—私の社会保障論』（2016 年 3 月 10 日発行）から選択して掲載しております。初出は毎日新聞朝刊に月 1 回掲載された「私の社会保障論」（2011 年 5 月～2013 年 9 月）です。したがって、記事中の人物・名称・活動・事物などで現在は亡くなっている方や変化している場合もありますのでご了解のほどお願い致します。

介護保険制度の誕生

介護に関する初の国レベルの検討会、介護対策検討会が 1989 年、市町村中心、社会保険方式の可能性を提言。1990 年、消費税を財源にホームヘルパー 10 万人計画などを盛り込んだゴールドプランがスタートした。しかし税財源に限界があり、1994 年、高齢者介護・自立支援システム研究会が介護保険制度の骨格を提言。1997 年「介護保険法」が成立、2000 年施行。



＊単行本
lifesupport-o.com/order33/books.html
＊電子版
<http://www.shinanobook.com/genre/book/3443>
『誇り・味方・居場所—私の社会保障論』
大熊由紀子著
B6 判変型 定価 1,600 円＋税